太陽には
かなわない

新倉一八

太陽の子

　もう四半世紀以上も前の話になってしまったが、友人から十数冊に及ぶ漫画本をもらった。中学生の小遣いでそろえた貴重なはずのコレクションを、彼はなにか忌々しいものでも破棄するように惜しげもなかった。どうやらそれは、作中で主人公のライバルが死んでしまったことへの抗議行動だったらしく、僕は密かに、幼いころ母親を失くした、その友人の生い立ちを思った。彼にとって残念だったのは、愛すべき登場人物の命を奪い、読者の同情を誘う公式が、当時も手軽に使われていたことだ。
　終戦を疎開先の満州で迎え、祖母に手を引かれながら、命がけで帰国した経験を持つ母は、とにかく戦争にまつわる話を避ける。朝の連続テレビ小説を見る習慣も、ストーリーが戦時へ展開した途端に終わってしまうようだ。彼女にとって残念なのは、「戦争」ほど人の感情を揺さぶる素材がほかにないということ。じゅうぶんに感情移入したところで、憎い戦争に登場人物の命を奪わせたなら、視聴者の琴線はたまらず高い音を鳴らす。なるほど、策の有効であることに異論はないが、体験に根ざした義理など持たぬ僕もまた、性分を理由にこれを嫌うようになっていた。
　「無慈悲な出来事は、現実社会で常に起こり続けているのに、わざわざ創作してまで届けてもらわなくてけっこう。うちは間に合ってます！」
　そんな「押し売りおことわり論」で身をつつみ、かたくなに眉をしかめ続けていたのである。
　だがあるとき、僕は自らの手で戒めを解いた。どういう風の吹きまわし？いや、イソップの寓話「北風と太陽」に照らせば、風よりも太陽のせいにしたほうが洒落になるというもの。なにしろ、長いこと着たきりだったやっかいな性分を、するりと脱がせてみせたのが「太陽の子」だったのだから。
　「太陽の子」は、作家、灰谷健次郎の長編小説である。舞台は神戸。小学６年生のヒロイン、ふうちゃんと、彼女の母親が営む琉球料理店「てだのふあ・おきなわ亭」に集う人々との、心温まるふれあいの物語。…と、言いたいところだが、凄惨な戦争の爪あとがそれを許してくれない。ふうちゃんのおとうさんとおかあさん、ろくさん、ゴロちゃん、ギッチョンチョン、キヨシ君…、登場する彼らの背に、重く悲しい沖縄がのしかかる。だが、底なしの悲しさは、天井知らずの強さを決して凌駕しない。おかげで僕は、おとぎ話に惹かれるような無邪気さで、彼らに、不謹慎なあこがれさえ抱くことができた。
　肉体労働をしながら「凝り性の人生」を歩む桐道さんが、ふうちゃんにこう話す。
　「人間のくらしに必要なもんと、そうでないもんの区別のつかん人間はわやになるね。沖縄の人は偉いね。そこがちゃんとしとるさかい、人間の中でも上等が多い」
　まことに遺憾ながら、この言葉は現在の僕にとっても、耳の痛い言葉であり続けている。
　ふうちゃんのおとうさんは、戦争の幻影に怯えるあまり、心を病んでしまった。療養に資することを願って、一家は沖縄へ帰る決断をするのだが、ついに計画は実現しない。出発の日を待たず、おとうさんが死んでしまうからである。まもなく物語は終わり、移入しきっていた僕の感情は、公式に則って、たいへん大きな役割を果たした。

神戸のミナト町にある「てだのふあ・おきなわ亭」は、いずれまた明るい笑顔とともに、変わらぬ明け暮れを取り戻すのだろう。人は懲りない生き物である。資本主義的な繁栄や私利私欲とは、決して天秤にかけてはならないものがあることを、喉もと過ぎればすぐに忘れてしまう。そしてまた、こっぴどい火傷を繰り返す。そんなとき、ふてぶてしくてそらぞらしい反省の弁など、苦々しくてとても聞いちゃいられない。ならば、ときには作中の愛すべき人たちの叫びに、耳を傾けてみるのも悪くないだろう。脱いだ外套を肩にかついだまま、旅人はいまそう思っている。だがもし、ミナト町で暮らす彼らのまだ知らぬ、あの阪神淡路大震災が、わざわざ追い討ちをかけにくるなら、やっぱり僕はそんな続編を読む気にはなれないし、そのときは、以前よりもしっかりと外套の襟を立て、帽子を目深に被りなおすことになるだろう。性分として…。